

## 26期生の皆様ー10

10月、11月は日本では大学祭のシーズンです。二週間前神戸に行く機会があったのですが、電車に乗っていると、ある駅で顔を塗りつぶし奇妙な服装をした若い子たちが入ってきて一瞬驚きましたが、すぐに「大学祭か」と合点がきました。来年の今頃みんなも大学祭を楽しんでいたらいいですね。

もう何年も前のことですが、自動車を運転しながらラジオを聞いていると、古代エルサレムの骨壺に「ヨセフの子イエス」という銘がつ



いていた、これが本当なら聖書以外でイエスに関する初めての資料となる」とアナウンサーが言っているのが耳に入りました（この銘は偽造だったらしい）。先日紹介した『不思議なキリスト教』の著者、橋爪大三郎という大学教授も「イエスについての文書記録は・・・キリスト教の初期教会が伝える福音書がすべてだと言っていい」と書いています。しかし、これは初歩的な誤りです。ナザレのイエスという人物に関しては聖書以外にも多くの資料が残されています。ということは以前授業で教えたが、念のためもう一度はっきり説明しておきたいと思います。というのは、「イエスは実在しなかった」と平気で言う人が今もいるからです。その人たちの言い分の一つが、イエスについてはキリスト教徒の文献しかないという誤った主張だからです。

高校の世界史にも出てくるローマ時代の歴史家タキトゥス（120年頃没）は、1世紀のローマの歴史を書いています。その中で、暴君として有名な皇帝ネロ（54~68）の時代、ローマにすでにかかなりのキリスト教徒がいたことを述べ、その宗教の創始者「クレストゥスなる者は、ティベリウス皇帝の治世下に元首属吏ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた」と説明しています。そして、その宗教は、彼がその本を書いた頃、つまり110年頃には、ユダヤだけでなくローマ市でも広がっていたと言っています。

このほかにも1、2世紀にローマ帝国の役人が、キリスト信奉者と呼ばれたり、キリストという者を拝んだりする新しい宗教があちこちで広がっていることを伝える報告があります。

しかし、キリスト教徒ではない人が書いた、イエスについての最も詳しい記述は、先日話したフラウイウス・ヨセフスという人のものです。この人は晩年に天地創造から始めた壮大なユダヤ人の歴史を書きました（『ユダヤ古代誌』と言います）。その書の終わり部分は、キリスト教の誕生のころと重なり、そのため新約聖書に登場する人物やグループについても書いています。例えば、洗礼者ヨハネやヘロデ大王、あるいはファリサイ派やサドカイ派といった宗教グループについても。そして、イエスについて「ヨセフスのキリスト証言」といわれる有名な証言を残しています。

「さてこのころイエスという賢人——実際に彼を人と呼ぶことが許されるならば——が現れた。彼は不思議な業を行う者であり、また喜んで真理を受け入れる人たちの教師でもあった。そして、多くのユダヤ人と少なからざるギリシア人とを帰依させた。彼こそは Kristus だったのである。ピラトは、彼が我々の指導者たちによって告発されると、十字架刑の判決を下したが、最初に彼を愛するようになった者たちは彼を見捨てようとはしなかった。彼らは師が三日目に復活して、彼らの中にその姿を見せたが、すでに上の予言者たちは、これらのことや、さらに彼に関するその他無数の驚嘆すべき事柄を語

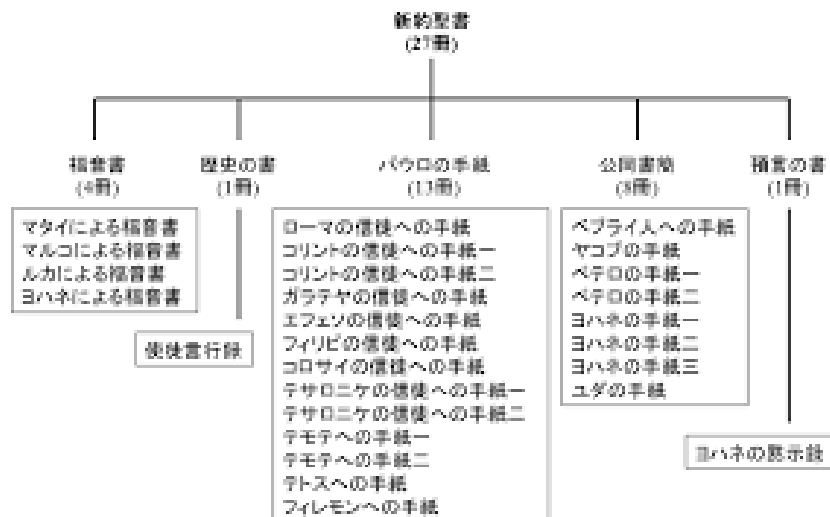


っていたが、それが実現したのだと言った。なお、彼の名にちなんでクリスティアノイと呼ばれる族は、その後現在にいたるまで、連綿として残っている」(このヨセフスという人はユダヤ教徒だったはずなので、下線部分が元々書かれたもので、その上に後のキリスト教徒が書き足したと言われています)。

また古いユダヤ人の書物には、イエスは「魔術を行い、ユダヤ人をまどわした」かどで、十字架につけられたとあります。

こういうことで、イエスについて聖書以外にもたくさんの証言があることはわかったと思います。でも、今上に挙げたものは、どれもイエスについては簡単な叙述に過ぎません。イエスが何をして、何を教えたのかについては、やはり聖書にしか書いてないのでしょうか。

イエスの言行を伝える聖書は新約聖書と呼ばれ、4つの福音書、最初生まれたばかりの教会の歴史である使徒言行録、それからパウロやペトロの書簡、そして預言書である『ヨハネ黙示録』からの計27書からなっています。この中でイエスの言行録はマテオ、マルコ、ルカ、ヨハネによる福音書です。この四福音書が、イエスについての第一の資料で、キリスト教の土台となっています。しかし、



福音書という名前をもって、イエスの活動について書いている本は、このほかにもあります。例えば『ヤコブの原福音書』、『ヘブル人福音書』、『ペトロ福音書』、『ニコデモ福音書』、『トマス福音書』そして数年前日本でも少し話題になった『ユダの福音書』など(まだまだあります)。ただし、これらは聖書として認められておらず、「外典」とか「偽典」言われます。

新約聖書は1世紀中にまとめられましたが、これらの外典は2, 3世紀のもので、しばしば聖書から話しを取っていますが、想像で書かれた部分も少なくない。しかし、イエスについての文献であることは間違いありません。つまり、イエスについては、昔の有名な人物、例えばシーザーとかクレオパトラとかと比べても、はるかに多い文献が存在するということです。

以前京都に住んでいたとき、ある友人が法然院というお寺にきて話しをしてくれる学者のお坊さんに「阿弥陀様の存在はどのようにしてわかるのですか」と尋ねたら、お坊さんは「阿弥陀如来が存在するかどうかは重要ではない。重要なのは阿弥陀如来が私達を救って下さると信じることだ」と答えられたそうです。でも私は思うのですが、もし阿弥陀様が存在しなかったら、私を救ってくれることはできないわけで、まずそのお方が存在することを確認することはやっぱり大切ではないでしょうか。

同じように、イエス・キリストが存在したから、キリスト教が生まれたのであって、もしイエスが実在しなかったのなら、聖書は作り話で、作り話が人を救うことはできないわけで、そういうものを信じるのは馬鹿げているということになるでしょう。ですから、イエスが実在し、どんな教えを言ったのかは どうしたらわかるのか、その記録は信憑性があるのかをしっかりと見ておくことは大切なことだと思います。ということで、今回は聖書とはどんな書物かを見てみましょう。